

Title	南國史叢(宇宿捷編, 薩藩史研究會發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.162(490)- 163(491)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

ニューギニア土俗品圖集 上卷

(南の會同人編
南洋興發株式會社刊行)

本書は南洋興發株式會社々長松江春次氏が昭和七年以來蘭領ニューギニア北岸に於て蒐集せられた土俗品、及び同氏が昭和十年一括購入せられた、故小嶺磯吉氏蒐集に係る舊獨領ビスマルク群島・ソロモン群島・東北ニューギニア地方等の土俗品を、松本信廣教授の主宰する南の會同人が昭和十一年以來整理研究の上、此の度刊行せられたものである。本上卷に收むるところは槍、弓矢、楯、短刀、斧、杖、漁具、舟、舞踏、木偶、護符及呪物、鼓等總數四百數十點に及び、廿七の圖版を付した、四六倍版一三三頁に互る詳細なる解説が、其々松本信廣・八幡一郎・杉浦健一・中野朝明・小林知生・岡正雄等の同人諸氏により分擔執筆せられてをり、卷末には別にコロタイプ圖版六二葉を付し、風景及び風俗寫眞三二、土俗品三二三點が蒐録せられてゐる。

元來植民的發展を企てる者は、植民地の産業的開發に専心すると共に、一面同地居住民族との文化的融和を計る必要あり、土民と統治者との完全なる理解あつて初めて植民地統治の實績を擧ぐることが出来るのであり、土民を理解する爲には、土民の文化を研究の對象とする民族學が必要缺くべからざるにも拘らず、我國

に於ては此の方面の研究者尠く、未だ民族學博物館の設備さへ見ざることは、國運隆々たる現代日本にとり誠に遺憾千萬なことであるとは、松本教授を初め南の會同人諸氏の夙に痛論せられてゐるところであつた。併るに松江社長が多年内南洋たる我委任統治領ミクロネシアの産業的開發に盡瘁せらるゝと共に、更に外南洋にまでその發展の驥足を延され、同時にかくの如く多數の南洋土俗品を蒐集せられたばかりか、我國最初とも云ふべき民族學的圖録を公刊せらるゝに至つたことは、誠にその卓見の頌すべきものあり、今や一方には松本教授以下南の會同人の手により、我南洋委任統治領の民族學的調査の敢行せられつゝあるあり、我民族學界も漸くその活動期に入れるものとして、斯界の爲誠に慶賀に堪へないところである。(杉本忠)

南 國 史 叢

(宇宿捷編
薩藩史研究會發行)

昭和九年舊薩藩出身の青年學徒達によつて薩摩史研究會が組織せられ、同藩史の研究の外、先哲の傳記編纂、遺書の展覽會等を催し、其の事蹟の顯彰に努力しつゝあるが、昨年九月其の研究公表として南國史叢第一輯を、又本年七月其の第二輯を刊行せられた。後輯に於ては、鹿兒島といふ地名につきて(渡邊盛衛)琉球音樂の發生の姿(山内伶晃)畫聖城間自了に就いて(宇宿捷)薩藩に於ける郷土制度の一研究(川村洋)の各論說の外、史料として齊彬公御言行録が附載せられてゐる。

次に同輯掲載の南島の畫聖として三百年後の今日に至る迄島人

に崇敬讃仰せられる城間自了の略傳を紹介する。自了は名を清豐、童名を眞籠、唐名を欽可聖と稱し、慶長十九年十月十八日首里に孤々の聲を擧げ、父を清信と云ひ、其の長男である。彼は不幸にして生れながらの聾啞で父母は彼を廢人として教育を施さざりしに、自ら晝夜思索して事物の眞理を察知し、後、獨自にて晝道に精進し、研鑽琢磨の末、遂に其の蘊奥に達し、其の晝風は宋元の風格を傳へ筆力頗る強銳である又書を巧にし、餘技として彫刻の技を有し、其の名、國中に高く、國王尙豐之を聞き、召して其妙技を稱讚し、自了の雅號を與ふ。蓋し自ら萬事を得了するの意であらう。後、名作若干を遺して、正保元年十月十八日三十一歳の短生涯を以て逝去した。今日、沖繩聾啞學校に於ては、子弟をして毎月自了の命日に必らず墓參を行ひ、其の事蹟を景仰せしめて、身の不遇に沈む子弟の精神を鼓舞せしめてゐると云ふ。因に先般來朝して世人に深く感動を興へたかのヘレンケラー女史の經歷と彼我對照して、如上自了の傳を讀む時には大いに興味あるものである。

最後に、本文執筆の宇宿氏はわが慶應大學文學部史學科在學中より南島方面に關して研究を續けられ、既に本誌に、媽祖の信仰と薩南片浦林家の媽祖に就て、又南國史叢第一輯に「御教條」に就いて夫々研究を發表せられて居り、前途有爲の青年學徒で、氏の研究に對して敬意を表して筆を擱く。(昭和十二、七、二、武田勝藏)

木村謙次

(杉田雨人著
川又書店發行)

わが國の地理學の先覺者としては一般に伊能忠敬とされてゐるが、これに對してさきに『長久保赤水傳』を公にして、彼こそ日本地理學の鼻祖であることを明にした杉田雨人氏は、今般また『木村謙次』を公にし、從來近藤重藏の名におほはれて、世にあまり知られなかつた幕末の北海探險の第一人者たる彼の功績を顯揚されたことは誠に欣快にたえない。

著者は木村謙次の學歷や交友やその時代をのべつゝ、その中心を北海の探險に置き、『人は一生の内に一つ異常の仕事遂げた所に其の人物の偉らさが出來て來る。生れてから死ぬ迄いつも偉らしいものではない。其の一つの偉い仕事が認められぬと其人物は理もれ勝である。木村謙次は北虜の關心を以て偉いのである。此の偉らい北海探險の經緯は周ねく知られてゐない。私の傳を成さんとする意氣も其處にある』といふ立場から、彼が寛政五年松前視察に上つたこと、ついで寛政七年第二回の北遊をなしたこと、殊に寛政十年近藤重藏の北海探險には下野源助の名をもつてこれに加はり、探險隊の庶務のことに當り、二十歳も年少の、さうして坑急の性の近藤の下に、よくその壯舉を完うして、終にエトロフ島に日本領土の木標を立て得た事績を明にされた。

著者は水戸實業界の重鎮として極めて繁忙の人でありながら、たえずかゝる好著を公にせられることに對して敬意を表せざるを得ない。(松本芳夫)